



西遊補訳注（第十三回～第十六回）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004343">https://doi.org/10.24729/00004343</a>

## 西遊補訳注（第十三回～第十六回）

### 大平桂一

#### 第十三回

緑竹洞に古老に相逢い

蘆花畔に細しく秦皇のことを訪ぬ

悟空は山の上のくほみで「万鏡楼」の三文字を聞き、頭に血が上り、耳から金箍棒を取り、挿青天楼に飛び込み、なぐりかかったが、空振りに終わり、またなぐりかかったが、また空振りとなった。悟空はただちに罵った、

「小月王、貴様はどこの国王だ。こんなところで大胆にもお師匠様をペテンにかけるとは」

かの小月王は、何も聞かなかつたように、もとどおり談笑している。悟空はさらに罵った、

「このごぜめ！くそあまめ！なんで髪を伸ばした和尚に侍って歌ってがるんだ」

弾詞の女芸人は三人ともに知らぬ顔の半兵衛をきめこんでいる。

「お師匠様、もうまいりましょう」

と叫んでも、三蔵は何も聞こえぬ風だった。

悟空はとても不思議がり、

「おれさまは夢でも見てるのか、それとも青青世界の住人はみんな目無し耳無し舌無しなのか、なんとも笑えてくる<sup>1</sup>。お師匠様の真偽を見極めてから、天界で大暴れした時の本領を発揮してやろう、今軽はずみ<sup>2</sup>はいかん」

1 なんとも笑えてくる 原文は「好笑」。項楚注『寒山詩注』一百二十七に、「大いに好笑事有り、略ぼ三五箇を陳べん」とある。

2 軽はずみ 原文は「造次」。『水滸傳』第十九回、晁蓋一行が梁山泊の頭目王倫を殺し、梁山泊を乗っ取る場面に、「呉用一手扯住林冲便道、「頭領不可造次！」（呉用は片手で林冲をつかまえて、「お頭、軽はずみなまねはいけません」と言った）と用例がある。

金箍棒をもとに取めると、向かいの山の上に飛び上がり、目を見開いて観察していた。見れば三蔵はひたすらオイオイと泣くばかり。小月王が言った、

「陳先生、悲しむばかりでは埒があきません。お尋ねしますが、天の掘削の事はどうしましょう。もし西天に行かぬご決意なら、踏空兒たちに暇をやり<sup>3</sup>帰還を命じますが」

「昨日はまだ決心がつかせんでしたが、今日は心が決まりました。もう行かぬことにしました」

小月王は大喜び、人をやって踏空兒たちにもはや天を掘削する必要なしとの聖旨を伝達させる一方で、お抱えの女優たちにメーキャップをして<sup>4</sup>芝居をやる<sup>5</sup>よう命じた。

女優たちは一斉に跪き申し上げた、

「陛下、今は芝居をやれません」

「暦の上で祭祀によい日よくない日、植え付けによい日よくない日、入塾によい日よくない日、元服によい日よくない日、外出によい日よくない日はあるが、芝居によくない日なんぞ見たこともないぞ」<sup>6</sup>

「陛下、よくないのではなく、できないのです。陳先生はあれこれ教え切れないほどの心配事や悩みを抱えておられますから、世話物<sup>7</sup>をやったらまた泣き出されます」

「さてどうしょう。新作をやれ、古典をやってはならぬぞ」

「それはわけもないことです。でも古典ならやれますが、新作はやらない方が……」

3 暇をやり 原文は「打發」。用例としては『醒世恒言』巻三「賣油郎獨占花魁」に、「(朱十老)遂將三兩銀子、把與朱重、打發出門。」(朱十老はそこで銀三両を朱重にわたし、暇をやって店から追い出しました)とある。

4 メーキャップをして 原文は「粧飾」。『北史』巻十八景穆十二王下拓拔順傳に、「靈太后は頗る妝飾を事とし、數たび出でて遊幸す」とある。

5 芝居をやる 原文は「搬戲」。第十一回の注十九を見よ。

6 この部分は「通書」とよばれる暦の、某月某日は「宜出行葬」(外出や葬礼によろしい)、「宜拆屋」(家の解体によろしい)、「宜移居交易」(引越しや商売によろしい)といった記載を反映している。詳しくは『通書の世界 中国人の日選び』(リチャード・J・スミス著 三浦國雄監訳 凱風社)参照。

7 世話物 原文は「傳神戲」。『傳神』は、「顧長康人を畫くに、或とき數年日精を點せず。人其の故を問うに、顧曰く、四體の妍蚩は、本と妙處に關わらず、傳神寫照は、正に阿堵中に在り」(『世說新語』巧藝篇)とあるように、真に迫る描写を指すので、「傳神戲」は現実を忠実に反映した芝居を言うと考えられる。

「馬鹿もやすみやすみ言え<sup>8</sup>。今日は陳先生のお祝いでパーッと派手に宴会をやるうってのに、芝居やらずにすませられるか。お前らにまかせるから何幕かやっておくれ、そうすりゃ見所もあるだろう」

女優たちはただちに引き下がった。傍らの侍女二人がお茶のおかわりを持ってきた。

三蔵の席が定まると、奥の間<sup>9</sup>からドラや太鼓がひとしきり、縦笛<sup>10</sup>がひとしきり、そして大音声がひとしきり、舞台から聞こえてきたのはにぎにぎしい口上、

「<sup>とぎとうぎーい</sup>東西東西、本日演じますは「高唐煙雨の夢」のお芝居、まずは「孫丞相」五幕をご覧に入れます」

悟空は山の窟地に身を伏せていたが、口上がはっきりに聞こえ、こう思った、

取り込み中でもこんな分別があるんだ。

「「孫丞相」ってのがあって、その後で「高唐の夢」だって。どちらも全段やってから、やっとお開きにしてみこしを上げようってわけだ。ちよいとどこかへ行ってお茶でも飲んで、それからうちの和尚さまの様子を見に帰ってもいいだろう」

ふと背後から足音<sup>11</sup>が聞こえてきた。振りかえると、道童<sup>12</sup>が一人、年の頃は十三四、大声で呼びかけてきた。

「若和尚さま、若和尚さま、芝居見物のお供いたします」

悟空笑いながら、

8 馬鹿もやすみやすみ言え 原文は「亂話」。用例としては、『古今小説』巻四十に、「你却亂話、官府聞知傳説到嚴府去、我是當得起他怪性的？」（おまえがでたらめを言ったのを役人が知って嚴さま〔嚴嵩〕に伝達し、あっちが責任追及してきたらどうにもならんぞ）とある。

9 奥の間 原文は「後房」。『史記』巻一百七魏其武安侯列傳に、「（武安侯の邸宅の）前堂には鍾鼓を羅べ、曲旒を立て、後房の婦女は百を以て敷う」とある。

10 縦笛 原文は「畫角」。用例としては梁簡文帝の「和湘東王橫吹曲三首折楊柳」詩に、「城高くして短簫發し、林空しくして、畫角悲し」とある。

11 足音 『莊子』徐無鬼篇に、「夫れ虛空に逃るる者は、藜藿の跼跼の逕を柱ぎ、跟く其の空に位らば、人の足音の蹻然たるを聞きて喜ぶ」という用例がある。「誰もいない穴に住む人」によって後の洞天を導き出そうとしているのであろう。

12 道士に仕える少年を指す。用例としては『清平山堂話本』の「陳巡檢梅嶺失妻記」に、「（紫陽）真人曰、「我有箇道童、喚做羅童、年紀雖小、有些能處。今日權借與齋官、送到南雄沙角鎮、便着他回來。」（紫陽真人は言った、「私に羅童という道童がおる。年は若いが、いささか目端がさく。今日は臨時にあなたにお貸しし、南雄沙角鎮まで送らせましょう、そこに着いたら帰してやって下され」がある。

「いい子いい子、おれさまがここにいると知ってやって来たのか」  
「からかっちゃいけません、うちの主人はなかなか一筋縄ではいかぬ人  
ですよ<sup>13</sup>」  
「ご主人の名は？」  
「お客の接待が好き、物見遊山<sup>14</sup>が好きな緑竹洞主人と申します」  
「結構結構、茶席の亭主<sup>15</sup>はきっとそのお方にやって頂こう。お若い  
の、おれの代わりにちょっとここに坐っていてくれ。それまで芝居を見  
てて、芝居がはねるかどうか確かめてくれ。その間におれはご主人の所  
へ行って急場しのぎの食糧<sup>16</sup>を取って来るから、もしはねたらご苦労  
だがお若いの、すぐにもどって来て一声掛けるんだ」  
道童はニコニコ笑って、  
「おやすい御用です。洞の中はまったくさえぎるものとありませんか  
ら、勝手にお入りください。私はここにおります」  
悟空は大喜び、まっ黒い例の場所の方を見ながら、飛び跳ねながら走  
り、明るい石洞の前に来ると、一人の老翁にばったり出くわした。  
「和尚はどこから来られた。うちでお茶でもどうです」  
「もしお茶がないなら、おれも来やしません」  
老翁笑いながら、  
「お茶はどうかわかりませんが、和尚まあ行ってごらんさい」  
「もしお茶がないなら、おれも行きやしません」  
二人は旧知のように笑いあいながら歩いていった。石段を一つ通り過  
ぎると、突然水辺に洞天が現われた。

13 うちの主人はなかなか一筋縄ではいかぬ人ですよ 原文は「我家主人勿是好惹的」。「好惹」は「扱いやすい」の意で、普通は否定の副詞とともに用いる。用例としては、『醒世恒言』卷十三に、「老漢道、「勸你吃虧些。那雌兒不是好惹的」」（年寄りは言った、「よく聞けよ、ちょっとの損くらいがまんしとけ、あの女は一筋縄ではいかんのだ）」がある。

14 物見遊山 原文は「游觀」。蘇轍の「乞裁損待高麗事件札子」に、「京師の百司は應奉<sup>つか</sup>に疾る。<sup>しか</sup>而るに高麗の人は至る所に游觀し、虚實を伺察し、形勝を圖寫し、陰かに契丹の耳目と爲る。」という用例がある。

15 茶席の亭主 原文は「茶解戸」。新らしもの好きの董説が発明した言葉ではないかと推定する。訳は望文生義である。

16 原文は「救火資糧」。すぐ後に悟空は喉の渴きをうるおすために茶を要求しているので、「急場しのぎの食糧」とは茶のこととわかる。「資糧」の用例としては、『春秋左氏傳』僖公四年に、「若し陳鄭の間より出でて、其の資糧<sup>きようきりょう</sup>屨屨を共せしむれば、其れ可なり」とある。

「もうお宅ですか？」

「いやまだです。ここは仿古晚郊園と言います」

悟空が瞳を凝らしてよく見ると、なるほどすばらしい場所<sup>17</sup>である。左手には郊外の野原<sup>18</sup>が広がり、随意石が数個、葉の入り乱れる蘆が十本あまり、わらぶきの家を取り巻いている。門前には大きな紫柏<sup>19</sup>が一本、霞たなびく楓が数本、幹や枝が縦横に織り重なり、微風に小雨けぶる山林の風情である。林には竹垣が少し見えていて、垣根のあたりには草花が二三種類無造作に植えられ、中年の男がモスグリーン色<sup>20</sup>の杖をついて水辺を散歩していたが、ふと坐りこみ、清水をひとすくい、延々と口をすすいでいる。半時ほどすすぎつづけた後で立ち上がり、東南に向って楽しそうに一人笑っているのだった。悟空は男が笑っているのを見て、やはり東南の方を見たが、高樓も翠閣<sup>21</sup>も、急峻ながけも奇観の峰も全く見えず、雲か霞か、あるのかないのか、ほんやりとした二つの山影を認めただけであった。

悟空はひたすら茶が飲みたいので、どうして風光を愛でる気持ちになれるようか。老翁といっしょにひたすら先へと進んでいった。するとまた別の洞天に着いたのであった。

「ここも拙宅<sup>22</sup>じゃありません。擬古<sup>ぎこ</sup>太昆池<sup>たいこんち</sup>と申します」

まわりは百もの連峰にとり囲まれ<sup>23</sup>、それぞれの峰々は、顔を上げて空を見つめる形あり、うつむいて水を飲む形あり、駆け回る形あり、眠っ

17 場所 原文は「去處」。用例としては、『記』三十三回の「小妖伸手摸着道、「只見説話、更不見面目。師父、此間是什麼去處？」」（小妖精は手探りしながら言います、「お話が聞こえるだけでお顔は見えません。お師匠様、ここはいったいどこですか？」）がある。

18 郊外の野原 原文は「郊野」。『荀子』哀公篇第三十一に、「是を以て鳳は列樹に在り、麟は郊野に在り、鳥鵲の巢は俯して窺る可きなり」とある。

19 紫柏 日本名がなにかは未詳。用例としては『北齊書』卷二十二盧詢祖傳に、「（詢祖）長城を築く賦を作りて曰く、かなわく板は則ち紫柏、杵は則ち木瓜、何ぞ斯の材にして斯の用なるや」とあり、少なくとも「かなわく板」などには使えない材木であったことにはまちがいない。博雅の賜教を乞う。

20 モスグリーン色 原文は「緑錢」。緑色の苔の別称。沈約「冬節後至丞相第詣世子車中作」に、「賓階 緑錢 滿ち、客位 紫苔 生ず」とある。

21 翠閣 用例見当たらず。あるいは「翠樓」「翠館」のように、妓樓の連想を伴う言葉か。

22 拙宅 原文は「舎下」。元喬孟符「揚州夢」の楔子に、「今舎下に一女有り、年はまさに一十三歳、名を好好と曰い、善しく歌舞を能くすとある。

23 まわりは百もの連峰にとり囲まれ 原文は「只見四面一百座翠圍峰」。一般に美女が群れていることを「翠圍珠繞」と形容する

ている形あり、詩を吟ずる形あり、対座する儒者風の形あり、飛ぶものあり、鬼神のダンスあり、さらには牛・馬・羊のかっこうもある。悟空は笑って、

「石人・石馬<sup>24</sup>はみな彫り終わったのに、墓碑がまだ立っていないのは、墓誌銘の作り手がいないのでは？」

「若和尚、冗談はよして下さい、さあ水の中をご覧あれ」

悟空は言葉通り頭を下げてじっくり見つめた。すると水の中にも百あまりの連峰が逆さまに映っていて、水面のさざ波とあいまって、まさに一幅の山水画である<sup>25</sup>。悟空がうっとりしている時、釣り舟が何艘かまばらな蘆の間から出てきた。舟には髪はボサボサ顔は垢まみれの年寄りたちが大勢乗っており、何か歌っているのだった。「漁家楽」でもなければ、「採蓮歌」でもないその歌は<sup>26</sup>、

24 貴人の墓前に立てる石像。「石人」の用例は、應劭『風俗通』卷九怪神の石賢士神の条の、「汝南汝陽の彭氏は、墓の路頭に一石人を立つ、石獸の後に在り」があり、「石馬」の用例は、杜甫の「玉華宮」詩の、「當時 金輿に待す、故物獨り石馬」がある。

25 第十二回、第十三回はどちらも水をテーマにした空間が舞台になっている。第十二回は「飲虹亭」という水辺に張り出した建物で三蔵と小月王が対話していた。ここ擬古太昆池は緑竹洞天の一つ前の洞天であり、やはり水がテーマとなっている。その池の水は鏡の如く澄み切って、「水の中にも百あまりの連峰が逆さまに映っていて、水面のさざ波とあいまって、まさに一幅の山水画である」といった転倒像が水面に映っているのである。この光景はまさに高山宏が『庭の綺想学』（ありな書房 1995 年刊）で引用してみせたポー作「アルンハイムの地所」の「水中深く倒さまに映る天空に、丘の傾斜の花々がそっくりそのまま水に映って咲き乱れている」転倒像のものではないか。ちなみに董説が「まさに一幅の山水画である」と言っている倒立像を描いた山水画は中国美術史上ほとんど全く存在しないのである。『歴代名畫記』卷五晉の顧愷之の条に引く「畫雲臺山記」（これには偽作説がある。古原宏伸『中国画論の研究』所収の名論文「画雲台山記」参照）に、「下に礪を爲る。物景は皆な倒作す。清氣は山下に帯び、三分して一に偈し、以って上る。耿然として二重を成さしむ」とあるのが画論に見える唯一の例で、顧愷之の実作は残っていない。また、荒井健先生の示教によると、『水經注』卷四十漸江水に、「麻潭の下、若邪溪に注ぐ。水は至清にして、衆山の倒影を照し、これを窺うに畫の如し」とあり、倒立の山水画の実作は存在しないものの、董説の発想はあるいは『水經注』のこの条に基づくかもしれない。

その後老いた漁師たちを乗せた舟をまばらな蘆の間から登場させる趣向は、まさに水上の劇場で演じられるスペクタクルである。とにかく十二回・十三回の水をテーマにした空間は、ポーひいては『ノスタルジア』のタルコフスキーの系譜につながる光芒を放っているのである。付け加えると、この十三回は他の回と比較して非常に静かな書き方で、それ以前の惑乱と最後魔界から脱出をつなぐ中継点の役割を果たしており、十四回以降は文字通り坂道を下るように物語りは収束に向う。おそらく董説は十三回を丁寧書いた後、騎虎の勢いで残りを一気に呵成に書き上げたのであろう。

是非は到らず釣魚の處に

榮辱は常に隨う騎馬の人に<sup>27</sup>

客官<sup>も</sup>要し矇矓世界へは何處より去かんと問わるれば

推し去きては略略と<sup>ちよい</sup>抜き〔舟の櫓を漕ぐ動作か〕

抜き来たりて南に望いて揺らし

揺らしては又た推し

推してはまた<sup>ひ</sup>抜き

〔世の中の争い事は釣り人には関係ない、栄光と屈辱は馬に乗る高官につねにつきまとう。お客さん<sup>28</sup>、もし矇矓世界へはどの道をたどっていかとお尋ねならば、櫓を漕ぎ進めてはちよいと引き、引いたら南に向かって揺らし、揺らしたらまた進め、進めてはまた引く〕

悟空は「矇矓世界」の四文字を聞くと、すぐに老翁に尋ねた、

「その矇矓世界はどこに？」

「どなたをお探しで？」

「親戚に秦の始皇帝というのがいて、矇矓世界に引越したんで、そいつと一言話したいんです」

「そこへ行きたいんだったら、舟で渡って行かれたらよい。あっちの青々とした山の一带が秦の始皇帝宅の裏門ですわい」

「そんなに広い土地なら、行ったところでどこを探してよいのやら。行くのはやめました」

「わたしも始皇帝の知り合い、行く気になれないなら、わたしが話を聞きましょう。明日会ったら話とききます」

「おれには親戚がもう一人、唐の天子といい、そいつが秦の始皇帝の駟山鐸を借りて使いたいんです」

「アリアアリア、折悪しく昨日借りていかれました」

26 晏殊の詞「漁家傲」に、「一曲の採蓮 風 細細たり、人未だ酔わず、鴛鴦驚きて飛起すべからず」とあり、ここはそれを「漁家樂」「採蓮歌」と言いかえ、併称しているのだろう。

27 初の二句は明代の小品文によく出てくる詩句で、例えば『醉古堂劍掃』巻一に、「是非は到らず釣魚の處に、榮辱は常に隨う騎馬の人に」とまったく同じ句がある。

28 お客さん 原文は「客官」。用例としては『警世通言』第四巻に、「主人迎接上座。問道、「客官要往那裏去？」（主人は王安石を上座に迎え、尋ねた、「お客人はどちらへ参られます？」）



「いったい誰に」

「漢の高祖にです」

悟空は笑いながら、

「あんたは老人のくせして若者をまねて出任せばっかり。漢の高祖と秦の始皇帝はきわめつきの敵同士、あいつに貸すわけではないでしょう」

「若和尚、まだご存知ないでしょうが、秦と漢のあのころの確執<sup>29</sup>は今ももう消えました」

「そういうことなら、秦の始皇帝に会われたら伝えて下さい、二日たつて漢の高祖が使い終わったら借りに来ます」

「それは妙案」

悟空はずっとしゃべりつづけて、のどがかわいて来たのでわめき出した、

「茶をくれ、茶だ！」

老翁は笑いながら、

「若和尚は始皇帝のご親戚、古いぼれの私は始皇帝の昔なじみ、みんな一家の身内同然ですから、お茶でも食事でも御随意に。さあ拙宅へどうぞ」

二人は緑滴る連峰を通り過ぎ、それから脇道に入り、とうとう緑竹洞天にたどりついた。見ればあたり一面の青苔、天までそびえる竹藪、その中に四部屋からなる紫竹の家屋があった。

せかせかと中に入ると、なんと梁は湘妃竹<sup>30</sup>、棟柱は泥青竹、二枚の門扉は風人竹の竹糸<sup>きさくら</sup>を編んで作ってある。また方竹<sup>31</sup>の寝台が一つ置かれ、とばりも竹皮紙<sup>32</sup>である。老翁が奥<sup>33</sup>へ入って、蘭花玉茗茶を

29 確執 原文は「意氣」。白樸『墻頭馬上』第四折に、「我心中心氣怎消除」（私が心中のわだかまりはどうして消えようか）とある。

30 湘妃竹は斑竹のこと。『初學記』卷二十八竹第十八に引く張華『博物志』に、「舜死し、二妃涙下り、竹を染めて節<sup>むすぶ</sup>ちに斑となる。妃死して湘水の神と爲る。故に湘妃竹と曰う」とある。

31 方竹は真四角な竹。宋代張湜『雲谷雜記』（『魯迅輯古籍叢書』第四冊所収）竹之異品に、「武陵の桃源山に方竹有り、四面平整なること削るが如く、堅勁にして以て杖と爲すべし」とある。

32 「竹皮紙」の用例は見当たらないが、「竹紙」の用例は、宋代周密の『癸辛雜識』前集の簡槧に、「簡槧は古有る無きなり。陸務觀は、王荊公に始まり、其の後盛行すと謂う。淳熙末始めて竹紙を用い、高さ數寸、闊さ尺餘、簡板幾んど廢せらる」とある。

33 奥 原文は「後堂」。『漢書』卷八十一張禹傳に、「禹は性つき音声を習い知り、内に奢<sup>うま</sup>れ、身は大第に居りて、後堂にて絲竹莞弦を理う」とある。

二杯持って来たので、悟空はそれを受け取りゴクゴク飲み、喉のかわきもやっと収まった。

老翁は油竹の机を一つ、翠皮竹製<sup>34</sup>の椅子を四脚並べ、二人は向かい合って坐った。老翁はそこで悟空の八字<sup>パーツ</sup><sup>35</sup>を尋ねた。悟空笑って、

「おれはあんたに偶々出会っただけ、義兄弟になるわけでも<sup>36</sup>、夫婦になるわけでもない。おれの八字<sup>パーツ</sup>を聞いてどうするんですか？」

運命鑑定的一段は、前半のまとめをし、後半の伏線を張っている部分で、『西遊補』の重要な転回点だ。

「私は運命鑑定をやって<sup>37</sup>はずれたことはありません。若和尚は私の昔なじみ秦の始皇帝のご親戚だから、運命を占って、どんな幸運が待っているか見たげましょう。これは昔なじみに対する好意ですよ」

悟空は上を見上げて少し考えた後で、こう答えた、

「おれの八字<sup>パーツ</sup>は最高です」

「まだ私が占ってもいないのによく最高とわかりますね」

「おれは普段からよく人に占ってもらってるんで。おとし、青衣の占い師が運勢を見てくれた時、八字<sup>パーツ</sup>を口にただけで、その占い師はたまげて立ち上がり、最敬礼して、

34 「翠皮竹」は「翠竹」を指すであろう。唐代鮑溶の「雲溪竹園翁」詩に、「碾碾 雲溪の裏、翠竹 雲に和して（一に「雲の如く」に作る）生ず」とある。詩題からして「緑竹翁」と関連するかもしれない。

35 誕生の年月日時を干支で表したものの。婚姻の前に男女が互いに交換し、運勢を占ってもらおう。用例としては、『初刻拍案驚奇』巻三十四に、「尼姑道、「這多是命中帶來的、請把姑娘八字與小尼推一推看」」（尼さんが言った、「これはきっと運命がそうさせているのです、娘さん私にあなたの八字を占わせて下さい）」がある。また、『記』四十二回に、牛魔王に化けた悟空と、牛魔王の子紅孩兒が対話する場面で、悟空の正体を疑った紅孩兒が悟空を試して、「他（張道齡）見孩兒生得五官周正、三停平等、他問我是幾年、那月、那日、那時出世。兒因年幼、記得不真。先生子平精熟、要與我推看五星。今請父王、正欲問此……」（彼は私が五官端正、三停（額・鼻・顎の間の距離）が等しいのを見て、私に何年何月何日何時に生まれたかを尋ねました。私は幼いのははっきりとは覚えていませんでした。先生は宋子平の術（占星術）に精通しておられるので、私の五星（木・火・土・金・水）を占ってやるとのこと。今日父上をお招きしたのは、このことをお尋ねする意味もあったのです）と言い、そのすぐあとで、悟空が老齢のせい一度忘れしたと弁解すると、「父王把我八箇字時常不離口論說、說我有同天不老之壽、怎麼今日一旦忘了？」（父上は私の八字をいつも口になされ、私には天と同じ寿命があるとおっしゃっていたのに、なぜ今日は急に度忘れなさったのですか）と言いかえており、董説が『記』のこの部分を意識しているのはまちがいない。

36 義兄弟になる時には、必ず互いに生年月日を尋ねあい、兄弟順を決めるのが通例である。

37 運命鑑定 原文は「筭天池數命」。「天池」は天界にある池を意味するが、ここでは「天池數命」全体で「天命」を指しているのであろう。「池」が「地」の誤写である可能性も捨てきれない。「天池」の用例は、韓偓の「漫作」詩に、「懸圃 珠 樹と爲り、天池 玉 砂と作る」とある。

「失敬、失敬」とくり返し、おれを若旦那様と呼び、「あなたさまのは齊天大聖のと寸分違いません」と言いました。そう言えば、齊天大聖は昔天宮で怒りに駆られて<sup>38</sup>たいへんな神通力を発揮し、今ではもうすぐ仏に成られるそうですね。もしおれの八字<sup>パーツ</sup>があの人と同じなら、悪いはずがないじゃないですか」

「齊天大聖は、甲子の年、正月一日に生まれました」

「その通り、わたしも甲子の年正月一日に生まれました」

「ことわざに、「相好ければ命好く、命好ければ相好し」と申しますが、本当にうまいこと言ったものですな。あなたの八字<sup>パーツ</sup>が齊天大聖と同じなのは言うまでもなく、顔の方もエテ公面<sup>ずら</sup>ですな」

「まさか齊天大聖もエテ公面じゃありませんまいな」

「あなたにはせの齊天大聖で、単なるエテ公面、もし本物の齊天大聖なら、まさにサルの妖怪そのものです」

悟空はうつむいてちょっと笑い、

「ご老人、早いところ占い<sup>39</sup>を」

もともと悟空は石匣<sup>いしのはこ</sup><sup>40</sup>から生まれたので、自分の八字<sup>パーツ</sup>など知りもしなかったのだが、ただ仙宮の玉笈<sup>41</sup>に生年月日が登録され、それが深山幽谷に伝わっていたのを、たった今トリックを使って探り出したのであった。老翁はどうして悟空の口から出まかせ<sup>42</sup>を知り得ようか、早速悟空相手に運勢を講釈し始めた。

老翁が悟空に  
だまされたわ  
けではない。  
悟空の方こそ

「若和尚、気を悪くされないように、私は面と向ってお世辞を言うのは

38 怒りに駆られて 原文は「發惱」。元無名氏作『連環計』第四折に、「奉先且不要發惱、再慢慢的商議波」(奉先どの、先ずは怒りを収められよ、ゆっくり話し合いましょうぞ)という用例がある。

39 原文は「推命」。現代でも「四柱推命」などと使う。明代都穆の『都公譚纂』巻下に、「二公一日微服して王生に過ぎり、其れをして推命せしむ。王生は二公の聲を聞きて非常の人なるを知る」という用例がある。

40 正確には「仙石」から生まれた。『記』第一回到、「那座山(花果山)正當頂上、有一塊仙石。其石有三丈六尺五寸高、有二丈四尺圍圍。…内育仙胎、一日迸裂、産一石卵、似圓球大。因見風、化作一個石猴」(その山の頂上に、仙石が一個あった。その石は高さが三丈六尺五寸、周囲が二丈四尺の円形だった。…その中に仙胎を宿し、ある日それが破れて毬くらいの大きさの石卵が出てきた。風に吹かれて一匹の石猿になった)とある。

41 書物などを入れる玉製の笈。用例は王勃の「尋道觀」詩に、「玉笈 三山の記、金箱 五嶽の圖」とある。

42 原文は「空中結構」。「結構」は『抱朴子』勸學篇に、「文梓雲を干すも、臺榭と名づくべからざる者は、未だ班輪の結構加わらざるがゆえなり」とあるように、加工・建築を意味し、全体で空中楼阁の意。ここでは悟空の出まかせを言う。

だまされたの  
だ。

苦手なんです」

悟空は作り笑いをしながら、「お世辞が苦手ならなおのこと結構」

「あなたの運勢は太簇が基本で<sup>43</sup>、林鐘が仇、黄鐘が恩、姑洗が宅、南呂が難に当たります。今日は羽に当たる月で、折悪しく難星を犯し、一連の意外な災難<sup>44</sup>や揉め事<sup>45</sup>が起こるはずで。それから変星が来て運命に影響を与え、変星がこの月の主人です。占断の經典に、「変宮に逢着ば奇遇到り、佳人才子<sup>あう</sup> 両相逢う<sup>ふたりあい</sup>」とあり、若和尚はすでに出家の身であることを考慮すれば、夫婦の事に触れるべきじゃないんですが、運勢を論ずるとなると、やはり縁組の卦が出ていると言わざるを得ません」

また項王虞美  
人の話を持ち  
出した。

「乾婚<sup>かりのしゅうげん</sup>はしましたが、それも数の内に入りますか」

「縁組でありさえすれば、乾か湿かは問いません。さてあなたの運命ですが、さらに姑洗の角星に遭遇、これは忌星。突然また南呂の水星が来て運命に影響し、やはり難星です。經典に、「忌難並び逢うを悪海と名づく、石人鉄馬も也た当たり難し<sup>つよいくんげい</sup>」とあります。どういう意味かと言いますと、家族が増える慶事があり、親しい人と離別する悲哀もあるでしょう」

「お師匠様が一人増え、お師匠様の一人と別れましたが、数の内に入りますか」とすかさず悟空が尋ねると、

43 この部分の運命鑑定は十二律（古代の音階。一オクターブの音程を二等分してあり、一番低いのが黄鐘、その上に大呂・太簇・夾鐘・姑洗・仲呂・蕤賓・林鐘・夷則・南呂・無射・応鐘の格律を徐々に高く半オクターブずつ配列している）と七音（宮・商・角・羽の五音と変徴・変宮からなる）を組み合わせて行っている。董説の著作「黄鐘呂」（『夢石樓十種』の「掃葉録」に収める）と、『補』十三回の内容から考えて、十二律と七音と運命鑑定の配合は次のようになる。

黄鐘	宮	恩	南呂	羽	難
太簇	商	基本	蕤賓	変徴	
姑洗	角	宅	姑洗	変宮	
林鐘	徴	仇			

なお、十二律と七音の関係については「楽律溯源」（『青木正兒全集』巻二）参照。ただし、運命鑑定の論理の詳細は不明である。

44 原文は「横事」。元李壽卿『伍員吹簫』第三折に、「家有賢妻、男兒不遭横事」（家に賢妻がいれば、男は意外な災いには遭遇しない）とある。

45 原文は「閑氣」。『劉知遠諸宮調』君臣弟兄子母夫婦團圓第十二に、「因與男爭閑氣、夫婦便分離。傷悲一十三載、全無信息。」（義理の兄弟とつまらぬ事でいさかいをしたため、夫婦は別れ別れになった。悲しいことにその後十三年、まったく音沙汰がない）とある。

46 虞美人に化けて項羽の妻になったことを指す。

また前の話を  
持ち出した。  
後の事件の伏  
線を張ってい  
る。

「あなたは出家の身ですから、それもいいでしょう。ただ今日が過ぎると、また奇怪な事が起こります。明日は商と角の星にさしかかり、人殺しをせねばなりません」

人殺しなどお安い御用、恐るるに足らずと悟空は思った。老翁はさらにつづけて、

「三日後に変徴星へんちせいにかかります。經典に、「変徴の別号は光明宿、困蒙老子ボケろうじん<sup>47</sup>も也た清霊ま はっきり」とあり、難中に恩有り、恩中に難有り、と解釈できます。さらに日・月・水・土の四大変星が運勢にかかわり、若和尚はさっと九死に一生の経験をすることに」

悟空笑って、

「生き死になんてまじめに考える問題じゃありません。死ぬのなら何年死んだって結構、生きるのなら何年生きたって結構です」

二人の話がちょうど盛り上がっていた時、ふと見れば道童が息せき切って駆けて来て叫んだ、

「若和尚、芝居48はもうすぐはねます。高唐の夢はもう醒めました。早くもどつてもどつて！」

悟空はあわてて老翁に別れを告げ、道童に礼を言い、もと来た道をとって返した。

窟地に戻ると、必死に楼の上を見つめた。すると、「高唐夢」はもう一段残っているぞ、という誰かの声が聞こえてきた。

悟空はそれを聞き、また目を大きく開けて芝居の方を見ると、舞台には一人の道士と五人の仙人に扮した役者が登場して歌い始めた。

この愚か者一人を度却させんと、人情・世故すを都かたべて盡かんくせり。

則ち你なんじら俗人よよ、夢より回し時心さめに自ら付しあんせ要せよ<sup>49</sup>。

その場面を見終わったところで、舞台上ではまたもやにぎにぎしく口

47 困蒙老子 『易』の蒙卦に、「六四は蒙に困しむ、吝なり」とあるのを襲っている。「蒙昧に困しむ老子」ということで、ボケ老人と解した。

48 芝居 原文は「戯文」。『二刻拍案驚奇』卷二十七に、「汪秀才定席已畢、就有帶來一班梨園子弟上場做戲、做的は『桃園結義』『千里獨行』許多豪傑襟懷の戯文」（汪秀才は席順が決まると、俳優たちを連れて来て芝居を演じさせました。演じたのは『桃園結義』『千里獨行』など多くの豪傑の心情を描いた芝居でした）とある。

49 \*湯顯祖の戯曲『邯鄲記』第三十齣「合仙」に、「盧生一人を度却させんと、人情世故す把都せべて高談し盡くせり、則ち你なんじ世上の人よ、夢より回し時心さめに自ら付しあんせ要せよ。」とある。

上が述べられた、

「南柯の夢」の出来は今一つ、「孫丞相」こそよろしけれ。実は孫丞相すなわち孫悟空。その夫人はかほどに標致うつくしく<sup>50</sup>、五人の息子はかほど奇抜な結末。に風華スマート<sup>51</sup>。初めは和尚出身、後には天晴れの幕切れかな、天晴れの幕切れかな」

（評）秦の始皇帝の一件、これにてようやく決着<sup>52</sup>、文章の呼吸がかほどに変幻自在の境地に到るとは。

50 「標緻」の用例としては、元無名氏の『鶯鶯被』第一折に、「自家劉員外の便是。自從李府尹借了我十個銀子、可早一年光景也。本利都無。聞知他有個小姐、生的十分標緻、大有顔色。料他父親也無錢還我、我一心要娶他做渾家可不好」（それがしは劉員外と申すもの。李府尹がわしから銀十両を借りてから早くも一年がたったが、元金も利息も返さない。聞けば、あやつには娘があり、かなりな美形とか。父親には返す金もないのだらうから、手段を講じて娘を女房にしてやったらどんなによかろう）がある。

51 「風華」の用例は、『南史』卷十九謝晦傳に、「時に謝混の風華は江左第一爲り、嘗て晦と俱に武帝の前に在り、帝これを目して曰く、一時頓かに兩玉人有るのみと」とある。

52 決着 原文は「結穴」。もと風水術の用語で、気が潜伏凝集している場所を指したが、後世文学批評に転用され、文章の帰結、結末、締めくくりの意味で使われるようになった。これはその早い用例であろう。

## 第十四回

唐相公 詔に應じて兵を出だし

翠繩嬢 池邊に玉を砕く

悟空は山の窟地で口上をはっきりと聞き取り、つぶやいた。

「おれさまは石の中から生まれて以来、まったくひとりぼっち<sup>1</sup>、完全無欠の童貞の体だ<sup>2</sup>。いつ細君<sup>3</sup>をもらった？いつ息子が五人もできた？きっと小月王がことのほかお師匠様を気に入ったが、引き留められず、それはお師匠様がおいらを気に掛けているからだと邪推して、おいらに濡れ衣をさせようと芝居<sup>4</sup>をでっちあげ、やれ高官<sup>5</sup>になったの、亭主になったの、父親<sup>6</sup>になったのと言いつらし、お師匠様に翻意<sup>7</sup>させ、西方行きの決意を断とうという魂胆に違いない。軽々しく動かず、模様<sup>8</sup>眺めとしゃれこもう」

- 
- 1 原文は「獨獨光光」。「獨獨」は、「たった一人」の意味。「獨獨」の用例は無名氏『氣英布』第四折に、「樊噲云、「不知項王敗走那裏去。俺大領些軍馬趕上、殺他一陣、也好分他的功、不要獨獨等這騎面之夫佔盡了。」（樊噲が言った、「項王はどこへ逃げやった。わしが軍馬を率いて追っかけ、追撃して軍功のわけまえにあずかろう。顔に刺青した奴に手柄を独り占めにさせてたまるか。）」とある。「光光」は「すっかり、完全に無い」の意味。「光光」の用例は、張國賓『合汗衫』第二折に、「眼見一家兒燒的光光兒了也。教俺怎生過活咱。」（目の前で家がすっかり焼けてしまった。わしらはこの先どうやって暮らしていけばいいんだ）とある。
  - 2 原文は「完完全全」。「完全」をのばしたもの。『荀子』議兵篇に、「韓之土地、方數百里、完全富足而趨趙、趙不能凝也、故秦奪之。」（韓の土地は、方數百里、完全富足にして趙に趨むく、趙凝める能わず、故に秦これを奪う）とある。
  - 3 原文は「匹配夫人」。「匹配」のみで妻を指す。用例は『古今小説』第三十三に、「大伯擡起身來、指定十八歲娘子道、「若得此女以爲匹配、足矣。」（年寄り<sup>かた</sup>は体を起こし、十八歳の娘を指して言った、「もしこの娘を妻にできたら、満足です。」）とある。
  - 4 原文は「戲本」。馮夢龍『古今譚概』顏甲序に、「夫れ古來の筆乘、孰れか戲本に非ざるや？只だ一副の響鑼鼓を少くのみ」とある。
  - 5 「高官」の用例は、『孔叢子』卷第三公儀に、「今徒らに高官厚禄を以て君子を鈎餌すれば、信用の意無し」とある。
  - 6 父親 原文は「老尊」。『醒世恒言』卷二十二に、「原來父母雖亡、他的老尊原是務實生理の人、却也有些田房遺下」（父母はすでに亡くなりましたが、彼の父親は稼業に励む人だったので、田畑家作をいくらか遺してくれていました）とある。
  - 7 原文は「回心轉意」。『京本通俗小説』の「錯斬崔寧」に、「那大王早晚被他勸轉、果然回心轉意、把這們道路撇了。」（靜山大王はいつしか彼女に勧められ、なんと心を入れ替え、この商いをやめた）とある。
  - 8 模様 原文は「光景」。『初刻拍案驚奇』卷十二「陶家翁大雨留賓、蔣震卿片言得婦」に、「女子心下着忙、叫老媽打聽家裏母親光景、指望重到家來與母親相會」（娘は慌てふためき、ばあやに母親の様子を探らせ、家に帰って母親と再会しようとしてました）とある。

翠繩嬢がこ  
こでやっとお目  
見えしたと  
思ったら、す  
ぐに死ぬのは  
なぜか？翠繩  
嬢が死なねば  
心猿の目が覚  
めぬからだ。

八戒の放逐は  
伏線だ。

不意に三蔵が言った、  
「芝居はもう結構、翠繩さんと呼んで来てくだされ」  
すぐに侍女がやって来て、飛雲の紋を描いた玉の茶壺と、瀟湘<sup>9</sup>を  
描いた茶碗を一つずつ並べた。しばらくして翠繩到着、案の定その美し  
さは千年に一人、妙香は十里のかなたまでただよう、尋常ならぬ美人で  
ある。

悟空は山の窟地にいながら考えた、  
「世間で器量と言え、観音菩薩を引き合いに出すのが相場だ。おれ  
さまが観音菩薩に会った回数は少なく見積もっても十度や二十度はあ  
る。これほどの美形ならば、観音も弟子入りしなきゃなるまい。まずお  
師匠様が彼女に会ってどんな態度を取るか見極めなくては」

翠繩嬢が腰を下ろした時、ふと見ると八戒と沙悟浄がうしろにくっつい  
て来ているではないか。三蔵は怒って、

「猪悟能！昨夜は小畜宮<sup>10</sup>でのぞきを働き、わたしの愛姫<sup>ダージン</sup>を驚かせた  
な。すでにおまえを放逐したはず、なぜまだここにいる」

「ことわざに「宵越しの怒りは持たず」とか、陳の相公<sup>だんな</sup>さま、今度ばかり  
はお許しを」

三蔵「もし立ち去らないなら、わたしは離縁状<sup>11</sup>を書いて、叩き出し  
てやる」

沙悟浄「陳の相公<sup>だんな</sup>が出て行けとおっしゃるなら出て行きます。亭主が妻  
を離縁するには離縁状を書かなくてはなりません、師匠が弟子を追い  
出すのに離縁状は不要です」

八戒「そりゃまったく差し支えない。今じゃ師弟にして夫婦という手合  
も多いからね<sup>12</sup>。でも旦那さま、これから先あつしらにどこへ行けて

9 瀟湘は瀟水と湘水が合流する湖南省の景勝地。

10 『周易』の小畜には、「九三は輿輻を説く。夫婦反目す」とか、「上九は既に雨ふり既に處る、徳を尚んで載つ。婦貞なれども厲し。月望に幾し。君子征けば凶」とあり、いずれも第十四回の内容を連想させる。

11 離縁状 原文は「離書」。『大唐新語』卷三「公直」に、「魏元忠の男昇<sup>むすこ</sup>榮陽鄭遠の女を娶る。昇は節愍太子と武三思を誅し、韋庶人を廢せんことを謀るも克たず、亂兵の害する所と爲り、元忠も坐して獄に繋がる。遠は此を以って元忠に就きて離書を求む。今日離書を得て、明日改醮せしめんとす」とある。

12 余談であるが、金庸の武侠小说『神鵰俠侶』に登場する小龍女と楊過が、管見の及ぶところ「師弟にして夫婦」の唯一の例である。



んですかい」

三蔵「お前は女房の所へ<sup>13</sup>、悟浄はもちろん流沙河へ行け」

沙悟浄「わしは流沙河へは行かず、花果山<sup>14</sup>へ行ってニセ悟空になりましょう」

また持ち出し 三蔵「悟空は丞相になったが、今はどこにいる」

て来た。

沙悟浄「今では丞相も辞めちまい、他の師匠を見つけて、もと通り西方へ向っています」

三蔵「それならば、お前たち二人は途中できつとやつに出くわす。極力やつの邪魔をして、青青世界にやって来てからんだりしないようにしてくれ」

そこで筆と硯を取り寄せて、離縁状を書き始めた。

八戒を放逐するのはなぜか？ 情の魔は欲望に基づいて動く。猪八戒はまさしく欲の根だ。

悟能は吾が賊なり。賊にしてこれを留むるは吾れ<sup>かば</sup>窩なり。吾れ賊を窩わざれば、賊は宅無からん。賊吾れを<sup>した</sup>悉わざれば、吾れ自と潔からん。吾れ賊と合して相成し、吾れ賊と離れて各の得るあらん。悟能よ、吾れは汝を愛する無し、汝速やかに去れ。

[猪八戒はわが弟子にして悪人である。悪人なのに彼を身辺に留めたのは、私がかばったのである。私が悪人をかばわなければ、悪人には居場所がなくなる。悪人がつきまとわなければ、私は汚れなき心情を保てよう。私と悪人がいっしょになれば、強盗団となるし、離れば双方に利益があろう。悟能よ、私はお前が嫌いだ、ただちに立ち去れ。]

八戒は号泣し、離縁状を受け取った。三蔵はもう一通書き出した、

離書<sup>か</sup>を寫く者は、小月王の愛弟陳玄奘なり。沙和尚は妖精にして、容貌は沈深<sup>15</sup>、雑識未だ断たれず、吾が徒に非ざるなり。今日逐いたれば、黄泉に及らざれば見えざるなり<sup>16</sup>。離書の<sup>まか</sup>見證<sup>しょうにん</sup><sup>17</sup>は小月王

13 八戒が以前入婿した高老荘の妻を指す。『記』十八回。

14 悟空の昔の本拠のサル山。

15 「沈深」は本来容貌を容貌を表現する言葉ではない。例えば『隋書』卷七十三房恭懿傳に、「恭懿性は沈深にして局量有り、從政に違す。」とあるように、慎重な性格を形容する言葉である。

16 『春秋左氏傳』隱公元年、鄭伯が弟の段を追放した時、弟に加担した母に、鄭伯が「黄泉に及らざれば見えざるなり」（死ぬまで会わない）と誓った言葉をそのまま踏襲している。

17 「見證」の用例は『警世通言』卷八に、「這漢慌了道、「見有兩個轎番見證、乞叫來問」（この男は慌てて、「駕籠かきをやっている二人の証人がおります。呼んできて尋問を受けさせて下さい」と言いました）とある。

なり。又一人は翠繩嬢なり。

[離縁状を書いたのは小月王の愛弟陳玄奘である。沙和尚は妖怪で、容貌は重厚。かれは俗念が断たれておらず、私の弟子にふさしくない。今日放逐したからには、死ぬまで再会することはない。離縁状の証人は小月王であり、もう一人は翠繩嬢である。]

沙悟浄は号泣し、離縁状を受け取ると、二人いっしょに高樓を降りて、とうとう行ってしまった。

三蔵はまったく気にせず<sup>18</sup>、小月王に笑いかけながら、  
「厄介払い<sup>19</sup>をしました」  
そして翠嬢に尋ねた、  
「朝から何をしていた？」  
「気分が沈んでいたの、烏棲曲<sup>20</sup>を一首作りました。歌って差し上げましょう」  
すぐに袖をたくし上げ、眉根を寄せて、玉をころがすような声で歌い出した。

月華<sup>21</sup> は二八 星は三五  
ボタボタ みずどけい トントン たいこ<sup>22</sup>  
丁丁と漏水 鑿鑿と鼓<sup>23</sup>  
そうしそうあい  
相思相憶なれども河橋<sup>23</sup>に阻てられ  
可憐の人は度る可憐の宵<sup>24</sup>

歌い終わると、悲しみに耐えぬ風情で、  
「相公、わたしたちはもうおしまい」  
と、三蔵を抱きしめて慟哭した。三蔵はビックリして、やさしい言葉<sup>25</sup>で慰めようとした。

18 まったく気にせず 原文は「毫不介意」。『後漢書』卷三十八度尚傳に、「尚は人人を慰勞し、深く自ら咎責し、因りて曰く、「卜陽等の財寶は數世を富ましむるに足れり、諸卿但だ力を并せざるのみ。亡（うし）なう所は少少、何ぞ意に介するに足らん」と」とある。

19 厄介払い 原文は「遣累」。梁劉勰の『新論』防欲に、「故に明なる者は、情を刳りて以て累を遣り、慾を約して以て貞を守る」とある。

20 後出の楊慎の「烏栖曲」を指す。

21 庾信「舟中望月」詩に、「舟子 夜家を離る、舡を開ちて月華を望む」とある。

22 顧況「公子行」に、「朝遊 鑿鑿と鼓聲發し、暮遊 鑿鑿と鼓聲絶ゆ」とある。

23 庾信「李陵蘇武別贊」に、「河橋 兩岸、路に臨みて悽然たり」とある。

24 \*詩の全体は楊慎『升庵集』卷十三に収められた「烏栖曲」四首の四をそのまま使っている。

25 原文は「好言」。『詩經』小雅正月に、「好言は口自りし、莠言も口自りす」とある。

翠嬢は泣きながら、

「お別れは間近なのに、まだそんなことを」

指で指し示しながら、

「相公、南の方向を御覧なさい、すぐにわかりますから」

三蔵が振り向くと、一群の軍馬が黄色の旗を押し立て、馬を飛ばしてやって来た。三蔵はすぐに胸騒ぎがし出した。しばらくすると、楼上是軍馬であふれかえった。紫衣<sup>26</sup>を着た人物が詔書を捧げ持ち、三蔵に拱手の礼をして、

「わたくしは、新唐から派遣されて来たもの<sup>27</sup>です」

兵士に向って、

「殺靑大將軍の衣服を換えて差し上げよ」

急いで香案<sup>28</sup>をすえつけ、三蔵は北面して跪き、紫衣の使者は南面して詔書を読み上げた。読み終えると紫衣の使者は五色の割符<sup>29</sup>を取り出して三蔵にわたし、

「將軍、ぐずぐずしてはおられませぬ。西方の部族の動静ただならず、ただちに出兵をお願い申し上げます」

三蔵「貴官は物わがりの悪い奴だ<sup>30</sup> わたしが家内<sup>31</sup>とちょっと別れてくる間待っといてくれ」

その場をサッと離れると翠嬢に会おうと輿座敷に駆け込んだ。翠嬢は

26 紫衣 古来皇帝・高官が身につける衣服、ひいては皇帝が高僧に下賜する紫の袈裟を指したが、元の薩都刺の「秋詞」に、「清夜 宮車は建章より出ず、紫衣の小隊 兩三行」とあるように、皇帝の侍衛官の制服と考えると辻褄が合う。つまり、新唐の皇帝が紫衣を着た侍衛官に三蔵への使者に立つよう命じたのである。

27 原文は「差官」。『水滸傳』六十七回に、「次日、蔡京會省院差官、資捧聖旨敕符、投凌州來。」(次の日、蔡京は中央政府派遣の役人を集合させ、聖旨敕符をもたせて、凌州へやりました)という用例がある。

28 皇帝の使者が臣下のもとに到着すると、臣下は香を焚く机を使者の前に用意跪いて詔書の宣読を聞いた。用例としては、元代高明の『琵琶記』第四十二出に、「勅書已來近、開得街坊上人亂紛紛、我每聽得便忙奔、辦香案、接皇恩。」(勅書が近づいてくると、通りは人又人で騒がしくなり、我々は急いで行って、香案を設置し、皇恩に接した)とある。

29 帝が將軍に軍隊の指揮権を委任する時用いる。

30 物わがりの悪い奴だ 原文は「不曉事」。楊修の「答臨淄侯箋」に、「修の家の子雲は、老いて事を曉らず、強いて一書を著わし、其の少作を悔ゆ」とある。

31 家内 原文は「家小」。『仙傳拾遺』(唐杜光庭『太平廣記』卷三十所収)「凡八兄」に、「(楊)德祖は悄然とし、忽と未だ家小に別れざるを念うに、白獸は屹然として行かず」とある。

三蔵が將軍の姿になり、今にも出発しそう<sup>32</sup>なのを見ると、両手で三蔵に抱きついたと思ったら、ワッと地面に泣き伏し、叫んだ、

「相公<sup>だんなさま</sup>、どうしてあなたを行かせられましょう。あなたは本来蒲柳の質、將軍になったら朝は風吹きささぶ山、夜は水際に寝泊りするのが定め。その折にはあなたの身の回りの世話をする身内もおりません。単衣を一枚重ね着したり、白いチョッキ<sup>33</sup>を一枚減らしたりといった寒暖の調節も、自分で注意して行わなければなりません。相公<sup>だんなさま</sup>、わたしの饒別の言葉を忘れないで。兵士には苛酷な刑罰を行ってはいけないわ。危害を加えようとするかも<sup>34</sup>。降伏してきた兵士はむやみに受け入れてはいけないわ。かれらが軍営に襲撃してくるかも。暗い森<sup>35</sup>にむやみに入ってはなりませんし、日が暮れて後、馬が嘶いたら前進してはいけません。春水際の花<sup>36</sup>を踏んづけてはなりませんし、夏、夕方の涼風を体に当ててはいけません。気分が減入っている時に今日の事を思い出してはなりませんし、嬉しい時にはわたしのことを忘れないで下さい。ああ、相公<sup>だんなさま</sup>、わたしはどうしてあなたを行かせられましょう。あなたといっしょに行ったら、あなたの軍律を犯すことになるでしょうし、あなたを行かせたら、ああ相公<sup>だんなさま</sup>、一人ぼっちの寂しい夜がどんなに長いか、あなたにはわからないでしょう。それならいっそわたしはアストラル体と化し、將軍用玉帳におられるあなたのお側にいる方がましというもの」

三蔵と翠嬢はひしと抱き合い号泣し、抱き合ったまま玉砂利をしきつめた池の端までやって来た。すると見る間に翠嬢は池に身を投げてしまったのである。

三蔵は痛哭し、

32 今にも出発しそう 原文は「匆匆行色」。唐の牟融「送客之杭」詩に、「西風 吹くこと冷たくして貂裘に透り、行色匆匆として暫くも留まらず」とあるのを襲っている。

33 白いチョッキ 原文は「白袴」。不詳。あるいは白い下着を指すか。

34 原文は「毒害」。『後漢書』卷二十八下馮豹傳に、「豹字は仲文、年十二にして、母父の出す所と爲る。後母これを惡み、嘗て豹の夜寐ぬるに因りて、毒害を行わんと欲す、豹逃走して免るるを得たり。」とある。

35 原文は「黒林」。宋代蔡襄の「圓山廟」詩に、「絶頂の黒林長く雨を帯び、曲屋 飛磴 塵を留めず」という用例がある。

36 原文は「汀花」。用例は、宋代永嘉四靈の一人であった徐照の「題趙運管吟篷」詩に、「汀花 一半 船篷に在り」とある。

「翠嬢、生き返ってくれ！」と連呼した。

その時、外から紫衣の勅使が馬を飛ばして駆け込んできて、三蔵をひっさらうと、兵馬が一斉に取り囲み、とうとう西の方角へ走り去ってしまった。

奇抜奇抜、ここまで来てやっと新唐が登場。作者の視界はなんと広大か！

## 第十五回

三更の月のもと玄奘は點將<sup>えつぱい</sup><sup>1</sup>し

五色の旗に大聖は神搖<sup>こころ</sup>ぐ

空はすでに暮れかけ<sup>2</sup>、悟空は山の窟地で、お師匠様が予想通り將軍となり、西方へお経を取りに行く一件を棚上げ<sup>3</sup>にしたのを見て、心中大いに乱れたが、どうすることもできず、下士官の姿に化けて、隊伍に紛れ込み、ごったがえす中で<sup>4</sup>一夜を過ごした。

翌朝<sup>5</sup>の明け方<sup>6</sup>、三蔵は軍営にどっかと腰を下ろし、「兵士急募、軍馬購入」と書かれたのぼりを上げよと下士官に命じた。下士官が命令の通りにすると、正午には新しくやって来た將士が二百万名に達し、またどうにかこうにか一夜を過ごした。

三蔵は当直將校と呼ばれる、白旗を持つ將校を派遣、その夜に軍令を伝達した、

「金鎖ヲ裝飾シタ將軍台ヲ造成セヨ。將士名簿ヲ作成セヨ。明晚登台シ、一命ツツ点呼閔兵ヲ行ウ」

「三更の明月」 翌日の三更の明月は真昼のように輝き、三蔵が登台して諸將に触れさとは絶妙なる表現。  
「我輩ノ今夜ノ閔兵ハ、常ト異ナル。鐘一ツデ將兵ハ食事ヲ作レ、鐘二

1 もと「劇で主將が將官を点呼し、任務の分担を決める」（角川中国語大辞典）であった。董説の生きた時代において、この言葉はある意味において非常に有名になった。明の天啓年間、闖党の崔呈秀が、東林党の人氏を『水滸傳』の豪傑になぞらえて名簿を作成し、『點將錄』と名づけて魏忠賢に呈上したのである。例えば錢謙益は浪子燕青に比擬された。

2 暮れかけ 原文は「入暮」。沈徳符の『野獲編』卷十九工部管庫に、「早に金錢を銜べ、暮に入りて即ち批允す」とある。

3 棚上げ 原文は「置之高閣」。普通は「東之高閣」という。一くくりにして棚に上げ、ほったらかしにする意。『晉書』卷七十三庾翼傳に、「京兆杜乂、陳郡殷浩、並びて才名世に冠たり、而翼これを重んぜざるなり。毎に人に語りて曰く、此の輩宜しくこれを高閣に束ね、天下太平を俟ちて、然る後にその任を議すべきのみ」とある。

4 ごったがえす中で 原文は「亂滾滾」。『警世通言』卷二十八に、「侍者看了一回、人千人萬、亂滾滾的、又不記得他、回説、「不知他走那邊去了。」」（侍者は見回しましたが、人出でごったがえしており、彼（許宣）の顔立ちもろくに覚えていませんでしたので、こう報告しました、「どこへいったかわかりません）」という用例がある。

5 翌朝 原文は「次早」。『古今小説』卷四十に、「過了一宿、次早沈鍊起身、向賈石道、「我要尋所房子、安頓老小、有煩舍人指引。」（一夜をあかし、その翌朝に沈鍊は起床すると、賈石に言いました、「私は家を借りて家族を落ち着かせたいのだが、あなたに周旋をお願いしたい）」

6 明け方 原文は「平明」。用例は『荀子』哀公篇に、「君は味爽にして櫛冠し、平明にして朝を聽く」とある。また王昌齡の「芙蓉樓に辛漸を送る」詩にも、「平明に客を送れば楚山孤なり」とある。

ツデ軍装ヲ装着セヨ、鐘三ツデ心ヲ鎮メ<sup>7</sup>気合ヲ入レ<sup>8</sup>、鐘四ツデ台下  
ニテ閱兵開始」

白旗の当直将校が命を受け、大声で、

「各将よく聞け、將軍の御命令なるぞ。今夜の閱兵は、常と異なる。鐘  
一つで将兵は食事を作れ、鐘二つで軍装を装着せよ、鐘三つで心を鎮め  
気合を入れ、鐘四つで閱兵開始、遅刻怠慢は無用！」

全軍の兵士<sup>9</sup>が答えた、

「ハハーッ。將軍の命令に誰が背きましようや」

三蔵はさらに白旗の将校に命じ、

本卦帰りだ。「全軍ノ兵士<sup>10</sup>ニ告グ、我輩ヲ將軍ト呼ブベカラズ、我輩ヲ和尚將軍  
ト呼ベシ」

白旗の将校はまた軍営を一巡して伝達。

将軍台上で鐘が一つ鳴ると、軍士はそれを聞いてあわただしく食事の  
用意をした。三蔵はまた白旗の当直将校に命じ諸将に触れさせた、

「拝謁・点呼ノ際ハ、平生鍛エシカラスベテ出スベシ、曖昧ナル応答、  
出鱈目ナル行動ハ許サヌ」

台上で鐘が二つ鳴ると、軍士はあわただしく武装した。三蔵は白旗の  
将校に命じ、閱兵旗を立て、軍営に触れさせた、

「河川山谷、スベテ警戒ヲ嚴重ニセヨ。軍営ニ入りコム、異様ナル言語・  
異様ナル服装ノ者<sup>11</sup>、説客や大陸浪人<sup>12</sup>ハ斬首」

7 心ヲ鎮メ 原文は「定性」。『記』第二十九回に、「國王定性多時、便問、「猪長老、沙長老、是那一位善於降妖？」（國王はしばらく心を鎮めてから、尋ねました、「猪長老、沙長老、どちらが妖怪退治を得意とされる？」）

8 気合ヲ入レ 原文は「發憤」。『論語』述而第七に、「女<sup>なんじ</sup>奚んぞ日わざる、其の人と爲りや、發憤しては食を忘れ、樂しみては憂いを忘れ、老いの將に至らんとするを知らざるのみ」とある。

9 全軍の兵士 原文は「合營將士」。「合營」は軍事用語。時代は後になるが、清代昭の『嘯雉雜錄』卷九魁制府（倫）に、「公營に至りて宣諭し畢り、勒公即ち速に就く。合營其の冤抑を訴え、公に代奏せんことを乞う」とある。

10 全軍ノ兵士 原文は「一應軍士」。「一應」はすべて全部を意味する。元關漢卿『竇娥冤』第四折に、「一應大小屬官今晚免參、明日蚤見。」（すべての屬官は今晚は參るに及ばず、明日朝早く出仕せよ。）

11 この項『補』第二回の注九を参照。

12 大陸浪人 原文は「遊生」。もともとは首都の太学に遊学する学生を指した。ここでは「説客」と併称されているので、全国をめぐって一旗揚げようとする人物ということで、一応「大陸浪人」と訳しておいた。「遊生」の用例は、『後漢書』卷七十八宦者傳曹節「乃ち四もに逐捕を出し、太学の遊生に及び、繋がる者千餘人。」がある。

着眼点。

白旗は命令通り、軍営を一巡して伝達した。三蔵さらに白旗に向って、  
「貴様は軍営の将士に伝えよ。「点呼不参者ハ斬首。轅門ヲウロツク者  
ハ斬首。仮病ヲツカウ者ハ斬首。キョロキョロスル者ハ斬首。自薦スル  
者ハ斬首。越権行為ヲスル者ハ斬首。騒ギ立テル者ハ斬首。長所ヲ匿す  
者ハ斬首。他人ニ成り代ワル者ハ斬首。内緒話ヲスル<sup>13</sup>者ハ斬首。女  
ヲ連レ込ム者ハ斬首。妄想ヲタクマシクスル<sup>14</sup>者ハ斬首。士気<sup>15</sup>ノ上  
ガラス者ハ斬首。激情ニ走ル<sup>16</sup>者ハ斬首」]

伝達が終わって、台上で鐘が三つ鳴り、軍営では各自心を鎮め気合を  
入れた。三蔵も両目を閉じ、煌々たる月光の下、高い將軍台で黙坐して  
いた。

半時ばかりして、台上で鐘が四つ鳴ると、全軍の将士は一斉に台前に  
集まり点呼を受けた。その様子は、

旌<sup>はたさしもの</sup>旗<sup>たかだか</sup>は律律<sup>17</sup>と、劍戟<sup>びっしり</sup>は森森<sup>18</sup>と。旌旗は律律と、二十八宿<sup>19</sup>に  
配着され、斗宿<sup>はた</sup>の羽は左に、牛宿<sup>はた</sup>の羽は右に、宿<sup>ひとつひとつ</sup>宿<sup>ひとつひとつ</sup>分明なり。劍戟  
は森森と、六十四卦<sup>くみあわ</sup>に合着され、乾の斧は奇〔数列〕、坤の斧は偶〔数  
列〕、爻<sup>ひとつひとつならべ</sup>爻<sup>ひとつひとつならべ</sup>布列らる。寶劍初めて吼え、萬山の猛虎も聲無く、犀の

13 内緒話ヲスル 原文は「交頭互耳」。普通は「交頭接耳」という。元關漢卿『單刀會』第三折に、「（關平云）…大小三軍、聽我將令、甲馬不許馳驟、金鼓不許亂鳴、不許交頭接耳、不許笑話喧嘩。」（關平が言った）…全軍に告ぐ、我が軍令を聞け。馬を早駆けさせてはならぬ、太鼓をむやみに鳴らしてはならぬ、ひそひそ話はならぬ、笑ったり騒いだりしてはならぬ」とある。

14 妄想ヲタクマシクスル 原文は「游思妄想」。『二刻拍案驚奇』卷三に、「翰林當下別了老尼、到靜室中游思妄想、過了一夜。」（翰林はすぐに老尼と別れ、靜室でいろいろ妄想をたくましくし、一夜を過ごしました）とある。

15 士気 原文は「心志」。『墨子』卷九非命中第三十六に、「是の故に昔三代の暴王は、其の耳目の淫<sup>ただ</sup>を繆<sup>た</sup>さず、其の心志<sup>しよあく</sup>の辟<sup>せき</sup>を慎<sup>しん</sup>まず」とある。

16 激情ニ走ル 原文は「爭鬪尚氣」。「尚氣」の用例は、蘇轍『龍川別誌』卷下に、「雄（州）の僚吏これを尤めて曰く、萊公は氣を尚ぶ、奈何んぞこれを以てこれに勝たんやと」とある。

17 律律 『詩經』小雅「蓼莪」に、「南山<sup>たかだか</sup>は律律、飄風<sup>ひょうふう</sup>は弗<sup>ひつり</sup>弗<sup>ひつり</sup>」とある。

18 森森 『藝文類聚』卷五十九武部戰伐に引く沈約「憫國賦」に、「矛は森森 密に堅ち、旗は落落にして疎に布かる」

19 二十八宿は、天を東西南北に分け、それぞれを七つの宿（星座）に分けてある。『淮南子』卷第三天文訓に、「五星、八風、二十八宿」とあり、高誘注に、「東方は角、亢、氐、房、心、尾、箕、北方は斗、牛、女、虚、危、室、壁、西方は奎、婁、胃、昂、畢、觜、參、南方は井、鬼、柳、星、張、翼、軫である。用例としては、『説苑』正諫に、「茅焦曰く、臣これを聞く、天に二十八宿有り、今死者已に二十七人有り。臣の來りし所以は、其の數を満たさんと欲するのみ。臣死人を畏るるに非ざるなり」とがある。



甲<sup>20</sup>は鱗の如く、五海の金龍も色減す。一個一個が凶星惡曜<sup>きょうぼうざんこく</sup><sup>21</sup>にして一声一声が霹靂雷震なり。

「旗さしものは高々と掲げられ、劍戟はびっしりと並べられてい旗さしものは二十八宿に配当され高々と掲げられ、斗宿の旗は左に、牛宿の旗は右に、一本一本すっきりと並べられている。劍戟は易の六十四卦に配当されてびっしりと並べられて、乾の斧は奇数列に、坤の斧は偶数列に一本一本並べられている。宝劍が初めて刃鳴りすると、山々の猛虎も黙り、犀の皮製の鎧の前にしては、海にすむ金色の龍の鱗も色褪せる。兵士の一人一人が勇猛果敢、彼らの発する一声一声が雷鳴のようだ。」

三蔵はそこで名簿に従って、一名ずつ点呼しながら、大声で、  
「将士よ、我輩は軍中では慈悲心をかけられぬ。各員心して首切りの刑を避けよ」

ただちに旗を振り命令を下し、六千六百五名の将士の名を一気に読み上げさせた。と、不意に「大将猪悟能」と、名が呼ばれた。三蔵が姓名を見ると、すぐに八戒だと気づいたが、軍中では軍規が厳しく、知り合いとは言えず、そこで、

「そこな将士、貴様は容貌醜怪、よもや妖怪がたぶらかしに来たのじゃあるまいな」

白旗将校に、「引っ立てて斬首にせよ」と命じた。八戒はひたすら叩頭、つづげざまに何度も「和尚將軍、どうか怒りを収めて下さい。わたくしめに一言いわせてから死なせてください」と申したてた。

八戒曰く、

本の姓は猪、兄弟順は八番目、三蔵に従って西方に上りますが、道中でむごい離縁状をつきつけられ、急いで岳父の莊園に身を寄せようとなりました。ところが莊園の妻はもう水の枯れた溝の中、水の枯れた溝の中に埋められておりました。またもと通り西方へ上れば、

20 犀の甲 『國語』齊語に「重罪を制するには、贖うに犀甲一戟を以ってす」、韋昭の注に「犀は犀皮なり、用いて甲と爲すべし」とある。

21 「凶星」の用例は、蘇舜欽の「感興詩」之三に、「云えらく昨凶星を見て、上帝 警戒を下す」とある。また「惡曜」の用例は、宋代葉適の「題柳山人壁」二首之二に、「地上に庸醫 満ち、天邊に惡曜 攢る」とある。「凶星惡曜」全体で、「凶神惡煞」というのと同じ。

はからずも將軍の陣地に行き当たり、將軍どうかあっしの命を救つて、軍営中で飯炊き<sup>22</sup>にでもお使いください。

三蔵は微笑を浮かべ、白旗の将校に繩をとかせた。八戒はつづげざま着眼点。に叩頭を百回、三蔵に拝謝した。

さらに「女將軍の花夔<sup>かき</sup>」と名が呼ばれ、一人の女將軍が太刀を差し馬を飛ばし、軍営の中におどり出た。これぞまさしく、

二八の佳人 体は酥の似く  
精華<sup>すいと</sup> 23 を呼吸りて<sup>24</sup> 天地も枯る  
腰間には挿す 把<sup>いっばん</sup> の飛蛟の劍  
殺し單くさん青青たる<sup>25</sup> 美丈夫<sup>26</sup> を<sup>27</sup>

〔二八十六歳の美女、体はバターのように甘く柔らか。男性のエネルギーを天地も枯らす勢いで吸い取る。腰には飛ぶ<sup>みずち</sup>蛟を彫った劍を一本挿しており今盛りの美男子たちを殺し尽くそうとしている。〕

「大將軍孫悟空」と名が呼ばれると、三蔵は顔色を変え、台下をチャッと見た。さて悟空の方は、混乱の軍中で三日を過ごし、とっくの昔に六耳獼猴の姿をした一軍士に化けており、「孫悟空」の三字を聞くと、飛び出して行って地面に這いつくばり、

「将校の孫悟空は兵糧輸送のため未到着です。その弟孫悟幻、和尚將軍の軍律違反を承知のうえで、身代わりとなって軍中に推参しました」

三蔵は言った、

22 飯炊き 原文は「燒火」。何良俊『四友齋叢説』卷十五史十一に、「(王) 振の家の厨下に、一燒火の老僕素より淳謹にして、振頗るこれを信聽す」とある。

23 生命を維持する基本的エネルギーを指す。『論衡』卷第四書虚篇に、「(顏淵) 力を彊<sup>つ</sup>して自ら極まり、精華竭き盡くし、故に早に夭死す」とある。

24 「呼吸」はここでは吸い取ることを言う。『尚書大傳』卷一下に、「陽盛んなれば則ち萬物を<sup>はきだ</sup>呼奈してこれを外に養い、陰盛んなれば則ち萬物を<sup>すいと</sup>呼吸りてこれを内に藏す」とある。

25 『詩經』衛風淇奥に、「彼の淇のかわの奥を瞻れば、綠竹の青青たり」とあり、毛傳は「茂り盛んなる貌」と言う。

26 美男子を言う。「美丈夫」の用例は、『史記』卷五十六陳丞相世家に、「絳侯灌嬰等、威な陳平を讒りて曰く、平は美丈夫なりと雖も、冠の玉の如きのみ、其の中未だ必ずしも有らざるなり」とある。

27 この詩は『全唐詩』に収める呂巖(洞賓)の「警世」詩に「二八の佳人體は酥<sup>こと</sup>の似く、腰間の仗劍 凡夫を斬る。人の頭の落ちるを見ざると雖然も、暗裏に君が骨髓<sup>ひそか</sup>をして枯らしむ」とあるのに基づくことは明らかである。

「孫悟空、おまえはどういう来歴なんだ。さっさと吐け<sup>28</sup>、命は取るまい」  
 悟空は（声をかけてもらったので）、飛び上がって喜び、しゃべりだしたのだった、

六耳獼猴が悟空に化け、二つの心が天地を騒がせることになった。悟空もまたそれに化けたのはなぜか？他人を巻き込むためだ。

昔は妖怪で、悟空の名をかたり、齊天大聖が三蔵と別れてからは、姻戚関係を結びました。姓と名をお尋ねになるまでもない、六耳獼猴の孫悟空大將軍と申します。

三蔵「六耳獼猴は、悟空の仇敵ではないか、今や新恩に感じて旧怨を忘れるとは、やはり善人だ」

白旗の將校に命じ、先鋒の鉄の甲<sup>かぶと</sup>一そろいを孫悟空に賜り、彼を破壘先鋒大將に任じた。

將士の点呼が終わると、三蔵は早速号令を伝え、軍士に「美女尋夫<sup>びじよのおとさがし</sup>」の陣形を取らせると、月明かりに乗じて西戎<sup>シルクロード</sup>に侵入した。

兵が西戎<sup>シルクロード</sup>の域内に入ると、「將士タチヨ、黄色ノ小旗ヲ合印ニシテ、敵味方ヲマチガウコト<sup>29</sup> ナカレ」と三蔵が命令。將士たちは旗をちゃんと配り終わると、またもやどンドン前進、山すそをまわったところで、青旗を押し立てた人馬に真正面から<sup>30</sup>ぶつかつた。悟空は先陣を仰せつがっていたので、すぐに飛び出していく。その一群の人馬の中に、紫金の冠をかぶった將軍が、刀を引っさげ悟空を迎え撃った。

悟空「手前は何者だっ！」

將軍「我こそは波羅蜜王<sup>31</sup> その人なり、手前こそ何者だ。命知らずにも刃向かいに来るとは」

「我こそは大唐の殺青掛印大將軍の旗下、先鋒大將の孫悟空なり」

「わしは大蜜王、手前の大糖<sup>てめえ</sup>（唐）王はもらったぞ<sup>32</sup>」

28 さっさと吐け 原文は「快供狀來」。『水滸傳』第三十六回に、「見都頭趙能趙得押解宋江出官、知縣時間彬見了大喜、責令宋江供狀。」（捕り手の頭趙能趙得が宋江を役所に引立てて来たので、知県の時間彬は大喜びし、宋江に自供させました）という用例がある。

29 敵味方ヲマチガウ 原文は「混淆」。『抱朴子』外篇卷三十二尚博篇に、「真偽顛倒し、玉石混淆す」とある。

30 真正面から 原文は「劈頭」。用例としては、『醒世恒言』卷二十「張廷秀逃生救父」に、「(王員外) 便搶過一根棒子、劈頭就打道、「畜生、還不快走！」((王員外は) ただちに一本の棒をひつつかむと、正面からなぐりかかって、「こん畜生、まだ出ていかんのか」と言いました) とある。

31 波羅蜜王 「波羅蜜」は「波羅蜜多」とも表記され、梵語(pāramitā)の音訳。人間を彼岸に導く至高の智慧を意味し、波羅蜜王が悟空の迷妄を断ち切るべく登場したことを示唆している。

32 「大蜜王」に「大糖(唐)王」をかけたシャレであることは言うまでもない。

蜜王は刀をグルグル回して斬りかかった。

「貴様のような無名の一兵卒<sup>33</sup>までオレさまの鉄棒の錆になりたいとは憐れな」

棒を振り上げ応戦し、数合刃を交えたが、勝負がつかない。その将軍が、「ちょっと待った！わしが系図<sup>34</sup>を持ち出さず<sup>35</sup>、本名を言わずに、手前を殺したら、手前が幽霊になった時、まだわしを無名の一兵卒と思はずだ。はっきり言ってやろう。オレ様波羅蜜王は余人に非ず、天宮を大いに騒がせた齊天大聖孫悟空の正真正銘の息子なり」

悟空はそれを聞いて心の中で、

「ふしぎな！まさか先日の芝居が本物だったとは。今や金箔つきの証拠<sup>36</sup>があるんだから騙される<sup>37</sup>はずがない。でもあと四人の息子はどこに？おれの妻は死んじまったのかどうか。もしまだ死んでないなら、今じゃ何をやらかしてるんだ。それからこいつは末っ子かな、それとも長男かな。やつに詳しく聞いてみたいがお師匠様の軍規厳しく<sup>38</sup>、とてもじゃないけど違反<sup>39</sup>はできない。ちょっと探りを入れてみよう」

ただちにどなりつけ、

「孫悟空はおれの義兄だが、息子がいるなんて聞いたこともない。なぜ突然息子が登場する」

33 無名の一兵卒 原文は「無名小將軍」。ふつうは「無名小卒」という。用例は、『三國志演義』四十一回に、「只見城内一將飛馬引軍而出、大喝「魏延無名小卒、安敢造亂、認得我大將軍文聘麼？」（見れば、城内から一人の將軍が馬をとばし、兵を率いて出て来てどくなりました、「無名の一兵卒魏延めが、わしが大将の文聘と知ってなお騒ぎを起こすか！」）とある。「無名小將」はおそらく董説が「無名小卒」に引っかけた言葉であろう。

34 系図 原文は「家譜」。明代葉盛の『水東日記』卷八范氏家譜世系に、「吾家は唐相履冰の後、舊くより家譜有り。咸通十一年、一枝江を渡り、處州麗水縣丞と爲る、諱は隋」とある。

35 「持ち出す」の原文は「通出」。「通」には説明するという意味がある。『封氏聞見記』卷六飲茶に、「(常)伯熊は黄被衫と烏紗帽を著け、手に茶器を執り、口に茶名をせつめい通し、區分指點するに、左右刮目す。」とある。

36 金箔つきの証拠 原文は「贓真」。このままでの用例はないが、劉本汪本では「真贓」となっており、「金箔つきの盗品」の意となる。時代は下るが、清代黃六鴻の『福惠全書』卷二莅任に、「夥黨を拿獲せるや有無や、真贓を起認るや有無や」とある。

37 騙される 原文は「着假」。『西遊記』第四十二回に、「妖王道、「不好了、着了他假也、這不是老大王。」(妖怪の王は言った、「しまった、やつに騙された、こいつは老大王じゃない）」とある。

38 厳しく 原文は、「森嚴」。『新唐書』卷二百一文藝傳序に、「是に於いて韓愈これを偃え、柳宗元李翱皇甫湜等これに和し、百家を排逐し、法度森嚴たり」とある。

39 違反 原文は、「觸犯」。韓愈の「尊號を冊するを賀する表」に、「微臣幸いに聖代に生まれ、刑章を觸犯す。息を恭罪に假り、死亡日無からん」とある。

わしの父だの  
伯父だの母上  
だの、一字一  
字が絶妙だ。

「<sup>てめえ</sup>手前は内幕を知らんのだ。わし蜜王とわしの父上悟空はもともと会ったこともない親子なのだ。父上の悟空はもと水簾洞の妖怪出身、わしの伯父牛魔王と義兄弟のちぎりを結んだ。伯父には夫婦関係を断った、芭蕉洞に住む本妻の羅刹女がおり、これがわしの母上だ。

火焰山の話の  
直後に『西遊  
補』の話が来  
る。この細や  
かな配慮をご  
覧あれ。

東南の地の唐僧三蔵が、西天に行き仏祖に会おうと思ったのが発端で、父上の悟空に頼んで臨時の弟子になってもらった。西方への道すがら、艱難辛苦を極めたが、ある日偶然火焰山に遭遇、師弟一行は途方に暮れた。父上はその当時こう考えた、「一日師と爲さば、終身父と爲す<sup>40</sup>」しばらく義兄弟の義理を断ち、まずお師匠様の恩に報いようと思い、まっすぐ芭蕉洞に行き、最初に伯父牛魔王に化けて母上をだまし、それから小さな虫に化けて母上の腹の中にもぐりこみ、半日もいて目茶苦茶に腹の中をひっかきまわした。その時、母上は痛みをこらえきれず、止むを得ず芭蕉扇を父上にわたした。父上の悟空は芭蕉扇を手に入れると火焰山をあおいで冷やし、とうとう立ち去ってしまった。

翌年五月、母上は突然わし蜜王を産み落とした。わしは日一日と成長、知恵もどンドンついてきた。そこで、伯父と母上はずっとそりが合わず、父上の悟空だけが母上の腹の中へ一度入り、わしが生まれたというわけで、わしが父上悟空の直系の実子であることは言わずと知れたこと、と考えるようになった。」

話を聞いて悟空は、泣くに泣けず、笑うに笑えず、頭が混乱していた時、ふと見れば、西北の方角から、小月王が紫の軍服を合印にした一隊を率い、三蔵を助けに来た。西南の方からは、また黒旗を押し立てた幽鬼兵が蜜王を助けに来た。蜜王軍の勢いは猛烈で、まっすぐに三蔵の陣営に突入、小月王を殺し、さらに身をひるがえして三蔵の首を切り落とした。あっという間に大混乱、四軍団入り乱れての殺し合い。

孫悟空はなんにも考えられず<sup>41</sup>、まわりに調子を合わせ、腰をかがめ

40 「一日師と爲さば、終身父と爲す」『記』第八十一回に、「行者道、「師父説那裏話！常言道、一日爲師、終身爲父。我等與你做徒弟、就是兒子一般」」（悟空は言った、「お師匠様、何を言ってるんですか！諺に、一日師と爲さば、終身父と爲す、と申します。わたしらはあなたの弟子となったからには、あなたの子供同然です」とあるのを使った。

41 なんにも考えられず 原文は「無主無張」。何も考えが浮かばないこと。「主張」の例は、韓愈の「送窮文」に、「各の主張有り、私かに名字を立つ」とある。

一刀両断、大  
聖よ目覚める  
がいい。

てあいさつ回り<sup>42</sup>。目の前で黒旗<sup>43</sup>が紫旗隊の中に倒れこみ、紫旗が青旗の上にかぶさり、青旗が一本紫旗隊に飛びこみ、紫旗が黄旗隊に走りこみ、黄旗が斜めに黒旗隊の中に入りこむ。巨大な黒旗が一面、空中から黄旗隊に落ち、黄旗兵を打ち殺す。黄旗兵が青旗隊に突入、何枚か青旗を奪ったら、紫旗兵に全部もっていられる。紫旗兵同士が殺し合い、何百本もの紫旗が血の海の中に倒れ、荔枝色の紅に染まると、黄旗兵に奪われ、黄旗隊中にもっていられる。青旗兵が黒旗隊に走りこみ、黒旗兵を殺し、小さな黒旗数本が空中を飛んで、一本の松の枝に落ちて来る。黄旗隊百万の兵が陥坑おとしあなに落ちこんで、黄色い小さな司令旗百本が青くて小さな司令旗の中に飛びこみ、まじりあって鴨頭緑色になる。紫色の小さな司令旗十六、七本が青旗隊の中に倒れこみ、青旗隊がそれを追いかける<sup>44</sup>、またもや空中を飛んで、黒旗隊の中に落ち、たちまち見えなくなった。

悟空は激怒また憤激、自分が抑えられなくなってしまった。

〔評〕五色の旗が入り乱れるのは、悟空の混乱した心が魔界を去る根本的契機で、『西遊補』一冊の中で最も重要な場面<sup>45</sup>である。描写<sup>46</sup>は入神の出来、まことにこれは天巧の妙筆<sup>47</sup>である。

42 腰をかがめてあいさつまわり 原文は「作揖」。腰をかがめてあいさつすること。『初刻拍案驚奇』巻一に、「王老強納在金老袖中。金老欲待摸出還了、一時摸個不着、面兒通紅。又被王老央不過、只得作揖別了。」（王老人はわりやり金老人の袖に銀を押し込みました。金老人はさぐって彼に返そうとしましたが、探し当てられず、顔が赤く染まりました。また王老人に説得されて、腰をかがめあいさつして別れました）とある。

43 以下、戦闘の場面を旗でシンボライズする手法が使われているが、この手法は唐代の伝奇小説「聶隱娘」（『太平廣記』巻百九十四の『傳奇』所収）に見られるものである。「聶隱娘」では女侠の聶隱娘と刺客精精兒が空中で闘うシーンが次のように描写される。「是の夜、明燭半宵の後、果して二幡子有り、一紅一白、飄飄然として牀の四隅に相撃つが如し。良や久しくして、一人空より踏れる有り、身首處を異にす。」

44 替わって立ち上がり 原文は「送起」だが、「迭起」の誤りとみて訳した。

45 最も重要な場面 原文は「大關目」。小説や芝居で中心となる場面を指す。『初刻拍案驚奇』巻三十八に、「關着許多骨肉親疎の關目在裏頭、聽小子從容表白來」（以下には、骨肉が親しくなったり疎遠になったりする場面が含まれております、わたくしがこれからゆっくり語りますので、ご静聴下さい）とある。

46 「描寫」の用例は、梅堯臣の、「和楊直講夾竹花圖」詩に、「年深く粉削げて墨縦見われ、描寫の工夫始めて俗を驚かす」とある。

47 天巧の妙筆 原文は「化工」。明代李贄の「雜說」に、「拜月西廂は化工なり、琵琶は畫工なり。夫れ所謂畫工なる者は、其の能く天地の化工を奪うを以てするも、其れ孰か天地の工無きを知らんや？」とある。

## 第十六回

虚空尊者<sup>1</sup>猿を夢より呼びかえし

大聖歸り來たれば日は山に半ばなり

悟空はすぐに我慢できなくなり、天宮を大混乱に陥れた時の、三頭六臂の法身<sup>2</sup>を現わし、空中でめったやたらに棒を乱打した。

すると悟空の後ろで、「悟空は空を悟らず、悟空は幻を悟らず」と叫ぶものがある。

振り向けば仏  
がいた。 悟空は振り向いて<sup>3</sup>尋ねた、

「貴様はどっちの国の兵士だ、俺様に会いたいだと」

頭をもたげると、蓮台<sup>4</sup>が見え、そこには一人の尊者が坐り、再び叫んだ、

「孫悟空よ、今なお目を覚まさぬか！」

悟空は棒で乱打するのをやめると、尊者に尋ねた、

「あんたは誰だ」

着眼点。 「わたしは虚空主人だ。おまえがニセの世界に長逗留しているのを見て、わざわざ目を覚まさせにやって来た。おまえの本物のお師匠様は今や腹ペコだぞ」

もし振り向い  
たらまた魔境  
だった。

悟空は少し意識がはっきりして来て、突如これまでの出来事はすべて心の迷いだったと気がついたのだった<sup>5</sup>。懸命に気持ちを鎮めると、もはや振り返らず、ひたすら虚空主人に教えを請うた。

1 虚空藏菩薩を指す。梵名 Akasagarbha。「一切の功德を包蔵すること虚空の如くなれば虚空藏と名く」（『織田仏教大辞典』）また『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無碍大悲咒陀羅尼經』にも釈迦牟尼仏が説法する宝座をとりまく菩薩の中に虚空藏菩薩の名が見える。すぐ後の「虚空主人」も同じく虚空藏菩薩を指すことは言うまでもない。

2 法身 『記』第九十五回に、「行者道、「使出法身、就此拿他也」（悟空は言った、「法身となって、すぐに奴を捕まえます）」とあり、修行によって超能力が生じた身体を言う。

3 振り向いて 原文は「回頭」。このシチュエーションから「苦海無邊、回頭是岸」という俗諺を踏まえるだろう。用例としては、『朱子語類』卷五十九に、「適見道人題壁云、「苦海無邊、回頭是岸」説得極是」（たまたま僧侶が壁に書いたのを見た、「苦海 邊 無し、頭を回らせば是れ岸」と。まったくその通りだ）

4 蓮臺は言うまでもなく仏の坐る座である。『法苑珠林』卷二十「故に十方の諸佛、共に淤泥の濁り出で、三坐の正覺、俱に蓮臺の上に坐す」という用例がある。

5 突如これまでの出来事はすべて心の迷いだったと気がついたのだった、 原文は「恍然往事皆迷一心」。朱熹『中庸章句』序に、「一旦恍然として、以て其の要領を得る有るに似たり」とある。

虚空主人「悟空よ、おまえはついさっきまで鯨魚の気の中にいて、やつに取り憑かれていたんだ」

悟空はまた尋ねた、  
 やつとこさ語 「鯨魚はどんな妖怪なんですか、天地世界を作り出せるとは」  
 られた。 「天と地が初めて分かれた時、清浄なものは上へ、濁ったものは下へと分かれていった。半分清浄半分濁ったものはまん中に残り、それが人間となった。ほとんど清浄でわずかに濁ったものが花果山に帰着、悟空が生まれた。ほとんどが濁って、わずかばかり清浄なものが小月洞に帰着し、鯨魚が生まれた。鯨魚と悟空は、同年・同月・同時にこの世に生まれた。ただし、悟空は正に属し、鯨魚は邪に属す。鯨魚の神通力はまさに广大無辺<sup>6</sup>、なんと悟空に勝ること十倍だ。その体はとてつもなく大きく、頭は崑崙山にのせると、足は幽迷国に届く。今は実部が狭すぎるので、暫時幻部世界に住んで、青青世界と自称している」

「幻部・実部というのは何です」

「この世界は三つの部分に分かれ、一つが無幻部、一つが幻部、一つが実部だ」

ただちに偈を唱えた、

ハッとすべて	<sup>ま</sup> 也た春の男女も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の根
を悟った気が	<sup>ま</sup> 也た新天子も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の <sup>ちから</sup> 能
する。	<sup>ま</sup> 也た青き竹箒も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の名
	<sup>ま</sup> 也た將軍の詔も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の <sup>さくぶん</sup> 文
	<sup>ま</sup> 也た鑿天の斧も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の形
	<sup>ま</sup> 也た小月王も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の精
	<sup>ま</sup> 也た萬鏡樓も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の <sup>けんちく</sup> 成
	<sup>ま</sup> 也た鏡中の人無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の <sup>からだ</sup> 身
	<sup>ま</sup> 也た頭風世（ずつうせかい）も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚が <sup>おこ</sup> 興す
	<sup>ま</sup> 也た緑珠の樓も無し	<sup>つまり</sup> 乃是は鯨魚の心

6 原文は「神通廣大」。『記』第六回に、「(惠岸) 徑入轅門、對四天王、李托塔、哪咤氣哈哈的、喘息未定、「好大聖! 好大聖! 着實神通廣大! 孩兒戰不過、又敗陣而來也!」(惠岸は) すぐに轅門から入り、四天王、李托塔、哪咤に向かってハッハッと息も荒く言いました、「大聖はすごい、大聖はすごい。まったく広大な神通力です。私は戦っても勝てず、負けて帰って来ました」という用例がある。



也 <sup>ま</sup> た楚の項羽も無し	つまり 乃是は鯖魚の魂
也 <sup>ま</sup> た虞美人も無し	つまり 乃是は鯖魚の昏 <sup>めくらま</sup> し
也 <sup>ま</sup> た閻羅王も無し	つまり 乃是は鯖魚の境 <sup>りょうど</sup>
也 <sup>ま</sup> た古人世（せかい）も無し	つまり 乃是は鯖魚の成 <sup>さくひん</sup>
也 <sup>ま</sup> た未来世（せかい）も無し	つまり 乃是は鯖魚の凝 <sup>ぎようこ</sup>
也 <sup>ま</sup> た節卦の帳（ちょうぼ）無し	つまり 乃是は鯖魚の宮
也 <sup>ま</sup> た唐の相公（だんな）無し	つまり 乃是は鯖魚の弄 <sup>じょうだん</sup>
也 <sup>ま</sup> た歌舞の態も無し	つまり 乃是は鯖魚の性 <sup>せいしつ</sup>
也 <sup>ま</sup> た翠嬢が啼くも無し	つまり 乃是は鯖魚の盡 <sup>ひろうこんばい</sup>
也 <sup>ま</sup> た點將臺も無し	つまり 乃是は鯖魚の動き
也 <sup>ま</sup> た蜜王の戦いも無し	つまり 乃是は鯖魚の関 <sup>かちどき</sup>
也 <sup>ま</sup> た鯖魚なる者も無し	つまり 乃是は行者の情

最後の一句で

さらにはつき

りした。

偈を唱え終わると、つむじ風が起こり、悟空をもとの山道に吹きもどした。ふと見れば、牡丹の木にさしかかっている日脚はまったく動いていないではないか！

さて、本物の三蔵は春の昼寝から目を覚まし、目の前にいた男女がとっくにいなくなっていることに気付いて大喜び、ただ悟空がいなくなったので、「悟能！悟浄！」とたたき起こし、

「悟空はどこへ行った？」

と尋ねた。

悟浄「わかりません」

八戒「わかりません」

ふと見ると、木叉<sup>7</sup>が色白の和尚を連れ、東南の方角から瑞雲に乗ってフワリと降りて来ながら叫んだ、

「唐から来た和尚さま、新しい弟子を採ってくれませんか。齊天大聖はすぐ来られます」

三蔵はあわてふためいて地面に跪き、拝礼した。木叉は、

「観音菩薩は、あなたが西方への途上で苦勞しておられるのを心にか

7 観音菩薩の弟子。法名は惠岸。『記』第六回に、彼が「木叉道、「吾乃李天王第二太子木叉、今在観音菩薩寶座前爲徒弟護教、法名惠岸是也」（木叉は言った、「我こそは李天王の第二子木叉なり。今は観音菩薩のもとで弟子となり、法名を惠岸と申す）」と名乗る場面がある。

け、若い弟子をもう一人送って来られた。ただまだ年若いので和尚さまいろいろ御高配をお願い致す。菩薩は悟青という法名をすでにつけ申した。菩薩はまた「悟青和尚様の四番目の弟子だが、序列は悟空の下、悟能の上とせよ。そうすれば空・青・能・浄の四字<sup>8</sup>になる。」とも言っておられた。」

三蔵は菩薩の法旨を承ると、弟子として受け入れ、木叉を見送ったのは言うまでもない。

はっきりと提示。

もともと鯖魚精が浮わついた心の悟空を惑わしたのは、三蔵の肉を喰らわんがため。そこで齊天大聖にまわりつく一方、小坊主の姿に化け、三蔵をだましにかかったのである。ところがなんと大聖はすでに虚空尊者によって目を覚まされていた。まさに「妖邪用い尽くす千般の計、心正しければ従来魔を怕れず」という諺の通りである。

叩き殺して更にすっきり。

さて、悟空は空中から接近するうち、お師匠様のお側に小坊主が坐り、そこから妖気<sup>9</sup>が高々と吹き上がっているのを見て、すぐにこれは鯖魚精が化けたものと推察し、耳から棒を取り出し、見境なく打ちかかった。小坊主はたちまち鯖魚精の屍に変わり、口から赤い光を放った。悟空が見つめていると、赤い光の中に、楼台が出現、楼の中には楚王項羽が立ち、

「虞美人、どうかこっちへ来てくれ！」

と叫んでいる。その赤い光はまっすぐ東南の方角へ消え去った。

三蔵が言った、「悟空よ、わたしは腹がへって死にそうだ」

悟空はそれを聞くとあわてて向き直り、お師匠様に向って最敬礼。この間に起こった出来事を初めから終わりまで語り尽くした。

実は三蔵は悟空が帰って来ないので、いらついていたところへ、帰ったと思ったらまたもや新しい弟子を叩き殺してしまったので、カッとして怒り出し、二言三言文句を言ってやろう思っていたのだが、新しい弟子が鯖魚の屍に変わったのを見て、悟空の好意から出た行為で、新弟子が妖怪だったとそこで知ったのであった。そして悟空の話があまりにも

8 この部分、仮に「青(情)を空しくすれば能く浄し」という意味になると理解しておく。

9 原文は「妖気」。『西遊記』第九十五回に、「行者早已知識、見那公主頭上微露出一點妖気」(行者はとくに気づいており、公主の頭の上にかすかに妖気が現われているのを見た)という用例がある。

すさまじいものだったので、怒り転じて喜びとなり<sup>10</sup>、

「弟子よ、ご苦労だったな」

八戒「悟空は遊びに行つて<sup>11</sup>慰勞されるのに、おれたちは苦労したのに、お師匠様から遊びに行つたとお叱りを受ける」

三蔵は八戒をどなりつけて黙らせると、悟空に尋ねた、

「おまえは青青世界で何日か過ごしたそうだが、こちらじゃなぜたった一刻しか時間がたたなかつたのか」

「心は迷いますが、時間は迷いませんから」

「心の方が長いのか、それとも時間の方が長いのか」

「心が時間より短い人は仏で、時間が心より短い人は魔物です」

一件落着。

沙悟浄が言った、「妖怪はすっかり掃蕩され、この世界は浄化された。

兄貴、やはり次の村まで托鉢に行つてくれ。お師匠様にしばらくの間静かに座禪をしてもらい、それから再び西方に向けて出発しよう」

「わかつた」

すぐに歩き出した。

百歩あまり進むと、突然土地の氏神<sup>12</sup>に出くわした。悟空がどなりつけ、

「人を馬鹿にしくさつて、おれがこの間おまえに一つ尋ねようと呪文を唱えてた時、まったく出てこなかつたじゃないか。世の中にこんなにえらそぶる氏神がおつたとは！ さつさとこちへ足を伸ばせ<sup>13</sup>。百叩きに

10 原文は「回曠作喜」。『記』第五回に、「大聖聞言、回曠作喜道、「仙娥請起、王母開閣設宴、請的是誰？」（齊天大聖はその言葉を聞いて、怒り転じて喜びとなり、「仙女さんたち、さあお立ち。西王母が宝閣を開け放つて宴会を催すとのこと、いったい誰を招待するのか?」と言つた）という用例がある。

11 原文は「去要子」。遊ぶことを意味する。用例は、『記』第二十七回に、「那猴子不知那裏摘桃兒要子去了。桃子喫多了、也有些嗜人、又有些下墜。」（あのサルめはどこかへ桃を摘みに行つて、遊んでいるんでしょう。桃はたくさん食べると胸やけしますし、腹が張ります）

12 原文は「山神土地」。「山神」の用例は、『後漢書』卷八十六西南夷傳苻都夷に、「是の時郡尉の府舎皆雕飾有り、山神海靈奇禽異獸を畫き、以てこれを眩耀し、夷人益ます畏憚す」とある。また「土地」の用例は唐李復言の『續幽怪錄』（『太平廣記』卷三百八所引）の「蔡榮」に、「中牟縣三異郷の木工蔡榮は、幼き自り神祇を信じ、食する毎に必ず分けて地に置き、潛かに土地に祝る。長ずるに至りても、未だ常て暫くも忘れざるなり」とある。「山神土地」で土地の守り神の意味となる

13 原文は「伸孤拐來」。「孤拐」はくるぶしを指す。『記』第三十二回に、「行者道、「…若是先吃脚、他啃了孤拐、嚼了腿亭、吃到腰截骨、我還急忙不死、却不是零零碎碎受苦? …」」（悟空は言つた、「…もし奴がまず足から食いだしたら、くるぶしを食い、脛骨を食い、腰椎まで食つてもなかなか死

してから話を聞いてやろう」

「たった今まで大聖さまは情魔のために人外境に引きこまれておられました。小神わたかしの力にも限界があり、人外境まで出かけて行って頭を地にこすりつけご挨拶申し上げるなど、どうして出来ましようや。大聖さま、お願いがございます。手柄で罪を償わせて下さい<sup>14</sup>」

「どんな手柄だ」

前後対応して  
いる。

「猪八戒だんなの耳の穴に詰まっていた花びらのかたまりを、小神わたかしは自分の手で取り除いて差し上げました」

結語はこの書物の主旨である。

悟空はどなりつけて氏神を下がらせると、ひたすら托鉢に向った。急いで空中に飛び上がり、桃の花の咲くあたり、一筋の炊煙が森の中からほのかに立ち上がっているのが見える。すぐに雲を下に向け、近づいてみると、予想した通りちゃんとした人家である。悟空はその中へ駆け込み、早速托鉢しようとしたところ、思いがけず学校<sup>15</sup>に行き当たったのである。学校には先生<sup>16</sup>が腰掛けており、何人が生徒を集めて授業をしている。さてどの書物のどの一句を講義していたとお思いか？ ちょうど次のところをやっていたのだ—「天地を範圍して過ごさず」<sup>17</sup>。

（評）『西遊補』という書物の全体が、鯖魚精が作り出した世界だったが、それが結末でようやく明らかにされる。まさに大作家の手腕だ。

付記 「西遊補訳注（二）」の第八回、「暇つぶしだ、小話本を一冊持って来い」「殿下、ここはとても忙しく、小話本を読む暇はございません」の「小話本」はどちらも「小説」に訂正する。荒井健先生示教。

ならない、じわじわ眞苦を受けることになります…」とある。

14 原文は「將功折罪」。普通は「將功贖罪」という。『記』第五十七回に、「縱是弟子不善、也當將功折罪、不該這般逐我。」（たとえ私が悪かったとしても、手柄で償わせるべきで、このように私を放逐すべきではありません）とある。

15 原文は「靜舎」。おそらくは「精舎」の誤り。「精舎」の用例としては『後漢書』卷六十七黨錮傳劉淑傳に、「淑少きころ學びて五經に明るく、遂りて隱居し、精舎を立てて講授す、諸生常に數百人あり」とある。

16 原文は「師長」。『周禮』地官の師氏に、「三行を教う。一に孝行と曰い、以て父母に親しむ。二に友行と曰い、賢行を尊ぶ。三に順行と曰い、以て師長に事う」とある。

17 天地を範圍して過ごさず 『易經』繫辭傳上に見える「天地の化を範圍して過ごさず」に基づく。「易は千變万化する天地の造化の動きを鑄型にはめ、人間に示す」という意味。悟空の冒険を締めくくるまことに意味深長な言葉である。